

最優秀賞

私の人生の大問一

埼玉県立伊奈学園中学校 3年

津田 美遊子

「心の輪を広げる」それは、輪、つまり心と心の間に境界線があるということだと私は考える。では、健常者と障がい者を分ける心の境界線は、いったい誰がどこにつくるものなのだろう。小学生の頃から、私はこの問いを自分の中にずっともっている。

私は奇形である右耳が聞こえない、小耳症という病気だ。右耳が聞こえない世界には、多少の不便がある。音がどの方向からしているのか分からない。右側から話しかけられても聞こえない。大好きな運動競技を学校でするとき、先生の指示が聞き取れなかったこともあった。そんな私だが、周囲から助けてもらいつつも「健常者」と世で呼ばれる中の一人として日常生活を送っていた。そして自分がそう生活していることに、何一つ疑問を持たなかった。

しかし、あるとき、Aという男の子を知った。聴覚障がいをもっているのだということだった。普段は特別支援学校に通う彼は、私たちとの関わりがない。しかし、私のいたクラスは、彼との交流会を開けることになったのだ。交流会で何をしようか。A君には何ができるのかな。そんな話し合いをしていたときだ。

「先生、なんでA君は、この学校に来てないんですか。A君の家、僕の家隣ですよ。」ある男子からの言葉に、先生はこう答えた。

「A君は、耳がみんなよりも聞こえづらいから、耳が聞こえづらい子のお勉強ができる学校に行っているんだよ。でも、この学校に行きたかったんだって。」

彼は納得したようだったが、私は納得ができなかった。耳が聞こえづらいのは私も彼と一緒に。なぜ別の学校に行く必要があったのだろう。初めて「健常者」と「障がい者」の違いについて考えた。

悶々とした思いを抱え迎えた交流会当日。みんなの拍手に迎えられたAは、母親らしき人の助けを断ってこう言った。

「こんにちは。私の名前はAです。交流会をありがとう。とても嬉しいです。」

笑顔を浮かべるAと彼を助けようとした女性を見て、私はハッとした。彼は、ほんの少しの周囲の助けが必要なだけなのだと。それは私も同じだ。「健常者」と「障がい者」の違いをつくっていたのは、「違い」を探していた私の心なのだと。遊ぶAは、私たちとなんの違いもなかった。競り合って勝ったら喜んで、負けたら悔しがる。最後は笑って話している。Aと私の同級生たちとの間に、違いはなにもない。自分で自分を情けなく思うと同時に、Aともっと関わりたいと思うようになった。そんな私ともAは、笑って一緒に遊んでくれた。遊びの合間には、ちょっとした手話も教えてくれたりもした。学校で教わったのだと誇らしげに言う彼に、私たちはその後の交流会で負けじと手話で話しかけたことを、昨日のこのように思い出せる。

私はあの交流会を通して、障がい者と健常者の間にあるものとは何か、考えた。確かに、身体の部分でどうしても違う部分はあるだろう。しかし、一人ひとりの身長や体重が違うように、身体の一部が誰かと違って、それは特徴の一つでしかない。では、なぜ特徴ではなく障がいなのか。

「健常者」と「障がい者」の境界線を引こうとする心が私たちにあるからだ。私たちは誰も万端で

はない。できること、できないこと、得意なこと、苦手なことがある。その上で互いを補い合うことができるようになれば、心の線がうみだした「障がい」というものはなくなるのだと思う。

私は自室の壁を振り返る。そこには、当時の担任の先生からもらった一枚の写真が飾られている。写真には、眩しいほどの笑顔で、交流会に参加したみんなが写っていた。